反時間的幕開け

経済学部　経済学科４年
佐藤　万里人

大きな窓ガラスの前で、一人の小さな男の子が母親の腕を引っ張って「この飛行機に乗れるの？」と、目を輝かせながらそう言った。母親は「そうよ、これから空を飛んで海を渡っていくんだから。だからこんなに大きいのよ」としゃがんでその少年の目線に合わせてから手を目一杯に広げて言った。そして二人の目の前で離陸準備をしていた飛行機が一機、飛び立った。その尾翼が見えなくなるまで少年はそこから動こうとしなかった。

「おい、和泉。ぼーっとしてないで手を動かして！」

「はい、すみません」

叱られたのは作業服を着たひとりの青年で、清掃用具を積んだ台車に手を掛けたまま、その少年を見つめていたのだった。桂木というその先輩の一言で我に返り、次の清掃場所まで移動した。「毎日たくさん飛行機何ぞ見てるだろ」との御指摘に「ええ」と苦い顔で相槌を打った。その後の彼は、黙々と仕事を続けた。

日にちが変わって午前1時。ようやく勤務が終わり、私服に着替えて自宅へ向かう。和泉は小さなショルダーバッグを背負って、ロードバイクで幹線道路を駆けてゆく。仕事の後のこのサイクリングも兼ねた帰宅が彼のお気に入りであり、天候が崩れない限りはそのロードバイクで通勤している。人気のない真っ直ぐ伸びる道路を走っているだけで気持ちがいいのだ。幹線道路から逸れると、多摩川沿いに自転車を転がせて、そして、小さなアパートの脇にある自転車置き場に停めた。腰に手を遣り、大きく天を仰いで首の骨を鳴らすと、自分の部屋がある2階へとのんびりと歩いて行った。

部屋は簡素そのもの。8畳のワンルームにキッチンとユニットバス。ワークデスクにノートパソコン、部屋の隅にそのまま置いてあるテレビ。敷布団と枕。その味気のない部屋の中に唯一特徴的なものは、オレンジ色のレプリカ物の宇宙服であった。紛い物とはいえ、その新品のままの服は彼が普段仕事中に着ている作業服とは違い、精密な造りになっており、その部屋に訪れた者の目を引く。とはいえ、簡素な部屋には変わりがない。

帰ってきてすぐに洋服を脱ぎ、風呂に入った彼は部屋着を着てワークデスクに座る。抽斗からB4版のノートを取り出した。表紙には「宇宙に近づくための飛行計画」と弱々しい文字で小さく書かれたものが薄れている。それを開いて、1ページ目から順繰りに読み始めた。中身は表紙の通りに旅行計画がびっしりと書かれており、さまざまなところから情報を掻き集めては書き込み、そして、プリントしたものやパンフレットなどが多く貼られているために、ノートは分厚くなっている。もちろんその厚みは何冊ものノートが貼りあわされた結果でもある。それは長年の彼の努力によるものだった。

じっくり読み返す彼の表情は、空港での気怠さとは打って変わって、生き生きとしており、趣味といってはやりすぎな、そうは言っても情熱を感じる、その積年の想いに彼は励まされていた。

最後のページを読み終えた後、布団を敷き、電気を消して横になった。

「ああ、……時間だ」

暗闇に謎を呟いたあと数十分、横向きになってレプリカを見つめたままじっとする。気付かぬ間に眠りに落ちる。これが彼の日常であった。

次の日のお昼頃、目が覚めると友人からメールが着ており、すぐに返信。その内容は「来週に海外旅行に行くんだけど、変圧器持ってない？あったら貸してほしいんだけど！」というもので、了解の意を送った後、あの紛い物の下に粗雑に置いてある大きなリュックサックを開いた。変圧器を探す為に中身を出していくと、洋服やら簡易トイレやら食糧などがたくさん出てきた。その中に電化製品がまとめてある袋があり、その中から探し物を見つけて取り出した。彼は友人に「今からなら届けに行けるよ」と打つとすぐに「じゃあ3時に駅近のあの喫茶店にいてくれ！」と返信があった。

「いや、助かるよ、マジで。ありがとう」

その喫茶店で変圧器を受け取ると、友人は嬉しそうに言った。

「海外って、どこに行くの？」

「ヨーロッパを巡ってくるんだ。っつってもただ、イギリスに行って、パリ、ベルリンに行くだけだけどな。それぞれ2泊ずつ行って、最期はイギリスに戻ってから帰国、っていう流れ」

「そうなんだ。イギリスはどの都市に行くの？」

「ロンドン。たぶんそれ以外には行かないかな、時間もあんまりないし。でも見たいとこは見れると思うんだ。一緒に行く友達が細かく計画してくれててさ。俺はそれに従うだけ。でもすげぇ楽しみ！」

彼の友人は身を乗り出す勢いで和泉に喋る。彼の脳裏には例のノートが浮かんでいて、イギリスはレスター、ドイツはケルン、フランスはパリのページを思い返していた。和泉のその浮いた視線を見て思い出したように

「いっくんのさ、昔見せてもらったあの『計画』は進んでる？　面白いよな。気合入ってるし。近づくための、ってのが美学だと思うよ、ホント。でもまさか、まだ何もしていないなんて言うなよな……？」

笑いながらアイスコーヒーを飲み、和泉に尋ねた。その笑いが気になったのか、和泉は顔を伏せてオレンジジュースを一口含ませ「まあ、進んでるよ、それなりに」とだけ言った。その応えに友人は肩を竦ませて微笑んでから「早いうちに行かなきゃ時を逃すぜ、おい」と励ます。やんわりと微妙な雰囲気が満ちる前に和泉は時計を見て「そろそろバイトに行かなくちゃ。じゃあ、それちゃんと返せよ」と言って店を出た。

大学にも通っていなければ、就職もしていない。誰から見てもフリーター。そんな彼は友人たちの生活を貶しつつも憧れを持ち、どちらでもない自分というものを見つめては寂寥感を纏い、希望を探したりする。その全てが「旅行計画」に詰まっているのだった。そこで何かが見つかると信じて、彼は日々バイトで資金を稼いでいる。

それから数日後、和泉がバイトの更衣室に行くと、桂木が先に入っていて、挨拶をされた。彼はいつも和泉とペアを組んで清掃に回っている先輩である。優秀な大学を出たのにもかかわらず、この仕事に就職し、生計を立てている。靴ひもを結んでいる彼だったがやがて、荷物をロッカーに入れて事務室にタイムカードを押しに行った。和泉もそれに倣ってすぐに事務室に向かった。外で待っていた彼に続いて仕事に向かった。今日の担当フロアに向かう途中で「今日、仕事が終わったら酒でもどうだ、和泉」と桂木が誘う。「ええ、いいですよ」と言ってそれに応じた。

いつものように清掃用具が乗った台車をあっちへこっちへ押して回って午前1時に仕事を終えた。2人とも着替えが終わると同僚に「お疲れ様でしたー」と言って歩き出す。桂木が酒を飲みに

誘うときはいつも、必ずと言っていいほど空港内にある24時間営業のレストランカフェである。そこで始発の電車が動き出すまでゆっくりとビールを飲み続けるのだった。

2人は軽い夜食としてサンドイッチを食し、そしていよいよビールを飲み始めた。桂木は普段、他愛のない話しかしない先輩ではあるが、酒の誘いがある時に限って興味深い話をする。日頃からお世話になっているという手前、最初はなんとなく付き合っていた和泉だったが、今では好奇心を持って聞くことができるようになった。それからは基本的に彼の誘いは断らない。

「和泉よぉ、なんか最近考え出したんだけど、聞いてくれないか？」

「ええ、いいですよ。何を考えているんですか？」

「あのな……これは俺たちみたいに深夜まで働いて、人が眠ってるはずの時間に起きている者に限った感覚かもしれないんだけどな。変な時間ってあるだろ。今日でもなければ昨日でもない、それでいて明日でもないって感じの。だいたい2時とか3時とかから曙光が出てくるまでの時間。あれって不思議じゃないか？」

「あっ、それ僕も同じこと思ってました。あれなんでしょうかね、変な感覚。強いて言うと、その時間帯の中でも眠りに落ちる前の時間」

「そうかもなぁ。それ考えてても気づくと寝てて、明日になってるって思う今日。お前も感じてたか！」

桂木は少し嬉しそうにビールを飲み干した。和泉はその様子を眺めてからぽそっと言う。

「桂木さんならその時間をなんて呼びますか？」

「そうだな……難しいな。『無重力時間』なんてどうだ？」

笑いながら空になったグラスを返却口に戻して2杯目。

「なんで無重力なんですか？」

「なんでって言われてもなぁ、思い付きだからな。ほら、あの小学校のときによくあったあの時間にも似てんじゃん。思いっきり遊んで帰って、夕方になって、それで疲れ果ててリビングかなんかで居眠りしちゃって、自分の感覚ではもの凄い間寝ちゃって、朝だと思ったら、まだ夜の7時とか8時で、びっくりしちゃうあの時間。『ウソだろ！』って母親に叫んだ覚えがあるぞ、俺。でもな、そのときの体がぽかぽかした感じが好きでな。その感覚を表すと『無重力』だよ。どう？」

彼は「ちょっとは説得力あったろ」と笑った。和泉は少し感心していた。自分も感じたことのある経験を他人の口から聞けるとは思ってもみなかったのだろう。

「それ、すごい分かるんですけど。僕も子どものころ、特に夏休みによくありました。さすがに時空を飛び越えたとは思わなかったですけど、すげぇって感動してました。確かに無重力でもいいかも知れないですね」

「その無重力時間を感じてるだけ、今は幸せだよな、たぶん。ま、こんなこと真剣に考えても仕方ないから、他の話しでもしよっか。最近どうよ、彼女とか……」

ここからはただの先輩の悪絡みで、性的にサディスティックな言葉とかを適当に並べるだけの酔っ払いになってしまった。その鬱陶しさを上手くかわして、始発が出るときまで彼に付き合った。

「じゃあ、ありがとな～。明日は休みだっけか？まっ、また今度な！　お疲れさん」

大きく手を振って地下鉄へと続くエスカレータに乗って降りながら言った。和泉は脇の下で小さく手を振りながらお辞儀をして、先輩が見えなくなると、すぐに自転車が置いてあるところまで歩き、いつもの通りを走っていった。

アルコールの力もあってか、シャワーを浴びると眠気が襲ってきて、その日はすぐに眠ってしまった。それでも和泉の表情は豊かで、少年のように眠りに落ちた。

次の日は先輩が言っていた通り、和泉は休み

の日。いつもよりも遅めに目を覚ました彼は、だらだらと布団を畳み、そして、顔を洗って歯を磨く。ついでに伸びはじめた髭も剃ってから、朝食を買いに外に出た。街は平常通りの午後を過ごしており、買い物客や遊びに向かう少年少女が歩いていた。近くのスーパーでタイムサービスの弁当を買って、川沿いまで歩いた。そこにあるベンチでのんびり弁当を食べ、ゴミ箱に捨てる。部屋に戻ると例のB4版のノートとペンケースをカバンに入れ、お気に入りの音楽をイヤホンに流しながら、休日によく行く喫茶店まで自転車で向かった。喫茶店に入り、カウンターでオレンジジュースを買ってお気に入りの席に座ると、カバンからノートを取り出して、何も書かれていないところを開いた。

開いたはいいものの、ペンが走ることはなく、無駄にペン回しをしたり、落書きをして消したり、ジュースを飲んだり、適当に時間を潰す。それでも何も思いつかない和泉は遂に諦め、席を立って外に出た。自転車に乗って適当に転がしていると、いつもの間にか、空港に来てしまっていた。とりあえず自転車を停め、ターミナルに入った。

搭乗手続きをしている人、最期の荷物確認をしている人、換金をしている人など、様々な人がいる。仕事や学校行事、旅行と飛行機の用途はそれぞれに違えど、和泉から見れば全ての人が旅人なのだ。特にやることのない彼は、ターミナルを見渡すことができるところに座って、ぼんやりと眺めている。するとそこへ、作業服を着た桂木が現れた。

「どうした、今日は休みなのに。やることないのか？」

「ああ、桂木さん。昨日はどうもです。ええ、何も手に付かなくて……。気が付いたらここにいました。でもすぐに帰りますよ」

「まあそんな急ぐことはないけど、この前言ってた『計画』でも進めてればいいじゃんか」

「あれ、その話覚えてたんですか？」

「酔っぱらってても、記憶は正常だっつんだ。それ、いいことだと思うぜ。やりたいことあるなら、やれよ。お前は俺と違って若いんだから」

「ええ。ありがとうございます。それでは失礼します」

和泉はお辞儀をしてから、そこから去った。その背中を心配そうに見つめる桂木。しかしすぐに手にしていたモップをゆっくりと動かし始めた。

それからまた一週間後。夏の空に台風が歓迎され、全線欠航となっていた。和泉は電車で空港までやってきて、そのタイムラインを見て驚いていた。ターミナルで足止めされている人々が外の様子を見つめて呆然としている。空港まで来たということはそれなりに期待していたのだろうが、それが現実に拒まれてショックを隠せない様子だった。彼はいつものように更衣室、事務室でタイムカード、出勤という流れを速やかにし、仕事を始めた。ターミナルはいつもよりも人足が滞っており、台車を押していく先々でも「すみません、通ります」と声を掛けなければならなかった。とはいえいつもとやることは変わらず、大した苦労はなかった。

台風が去る頃になってようやく、人々に案内が放送されて、一息に群衆が蠢いたために、清掃したところをもう一度綺麗にする必要があった。その諸々の作業が終わると、和泉は桂木とともに事務所に戻った。

「和泉、元気か？」

煙草を咥えながら、もごもごとライターで火を点けながら言った。唐突だったので、和泉は何も答えなかった。

「いやさ、なんか元気ないぞ。なんかあったか？」

「いいえ、特に何もないですよ。いつも通りです」

「そうか、それならいいんだ。じゃあお疲れさん」

「お疲れ様です」

和泉は自転車置き場に向かいながら、桂木がどうしてそんなことを思ったのかを考えていた。そ

して、駐輪場に着くと、今日は自分が自転車で来なかったことに気が付いて、電車も動いていないこの時間にどうやって家に帰ろうかと考え始めた。そして、結局タクシーを探して乗り場まで移動した。

自宅までは3千円近くかかったが、和泉は気にすることなく支払った。部屋に戻ると、机の中からパスポートと貯金通帳を取り出して溜息をついた。若干22歳にしてはそれなりの金額が通帳を満たしている。パスポートはというと、年月が流れに流れ、有効期限が翌年となっていた。和泉はまたしても溜息をつき、布団の上に横になった。

「今日変圧器返しに行くわ！」

例の友人に電話で起こされた彼は眠そうに、それでも「了解、いつものとこな」と言って切った。カーテンを開けると、青空が広がっていた。和泉はシャワーを浴びて、そして、自転車で約束場所まで向かった。

「いや～、良かったぞ。どこも見どころ満載でさ。ドイツなんかちょっとビビってたんだけどビールは旨いし、フランスは料理もいいんだけど、ルーブル美術館の壮大さに驚いたぜ！　一日じゃ全部見れないくらい広かったぞ。イギリスはあれだな……」

友人は自分の海外体験の素晴らしさをこの後も永遠と話し続けた。すごく楽しそうに、自分の見てきた別世界に対する大発見のごとく、和泉に喋りたくった。彼は彼で憧れながらその話を聞き、そして、顎が疲れてしまうほどの笑顔をずっと見せていた。終いにはその友人が「お前も行ってこいよ！」と再度言ってきたので「ああ」とだけ答えて解散になった。

一度自宅に戻りバイトの準備をしてから自転車に乗り、再出発。いつもと同じように幹線道路を、駆けていく。そして気が付けば駐輪場。更衣室で着替えをして、カバンの中に財布と携帯を入れようとしたときに、先ほど返してもらった変圧器を入ったままのことに気が付いた。それを取り出してから、ポケットに入れ、事務所に向かった。タイムカードを押してから作業に入るが、本日の担当が発着ロビーだったので、のんびりと仕事をしていた。その待合室では一組のカップルが「変圧器の有る無し」でちょっとした口論をしていたので、和泉は近づいて「捨てるつもりだったんですけど……」と言ってポケットにあるそれを手渡した。そのカップルは不思議そうな顔をしていたが、受け取ってお礼を言った。和泉が最高の笑顔で彼らを見送っていると、桂木はその光景を見て悲しそうに微笑んでいた。

仕事が最後の作業に入った時、桂木が空を見上げ「今日は新月なのに、月が見えそうなくらい空がきれいだな」とぼそっと呟いた。和泉は幻想的な言葉に戸惑って、独り言として流そうとしたが、小さく頷く。桂木はちらりと和泉を掠め見るも、やがて手元に視線を落とし、最後のごみ袋を閉じ、処理所に持て行った。和泉は先に事務所に入り、彼の帰りを待ったが、中々帰ってこなかったので探しに行くと、正面ロビーの一番大きな窓のあるところのベンチに座り、空を眺めていた。和泉は静かに後ろの席に座った。弱々しく座る桂木の背中を少し見て、彼に倣って空を見た。

「桂木さんこそ、何かあったんですか？」

桂木は振り向かず、何も体勢を変えることはなく

「そうだな。少しだけこの生活に弱気になったってとこかな。どうもしないんだがな。ふと、お前みたいのが羨ましくなって寂しくなるんだ」

こういうときにどんな言葉をかけていいのか分からずに、和泉は黙っていた。やがて静かに「先輩が言ってた通り、空が綺麗ですね」とだけ残して、一人で事務所に戻った。そんな和泉の後姿を桂木は、振り返って優しい目で送った。

和泉は自転車に乗りながら、幹線道路を走る。しかし、いつもよりものんびりとゆっくりと。足

を伸ばして蛇の軌跡を辿り、耳には風の音を靡かせ、視線は空へ。桂木が思わず言ってしまうのも理解できるほど、天上は美しい。時に輝く星々や、それに混じって光るジェット機が、その滑らかな夜を演出している。彼は「新月」の何処や、色の彼方を思い浮かべながら、少しだけいい気分になって家に帰った。

自転車を置いて、鼻歌を歌いながら階段をリズムよく駆けて家に入る。靴を脱ぎ、そのまま、シャワーを浴び、身体を拭いてパンツを履いた後、何の躊躇もなく壁に掛かっているオレンジ色の宇宙服を着た。初めて着るものだから、少し硬さが肌を苛めるが、それでもチャックを上げるとそれなりの形になっている。

ヘルメットもない間抜けな姿で和泉は布団の上に横になった。天井を見つめ、暗闇と戯れていると、身体が内側から温められているかのようにぽかぽかとしてきて、心地よい世界への入り口へと差し掛かった。

誰もがその入口に入らず、空気が薄くなるほど多くの人々が何かを期待し、そわそわと体を震わせている。手荷物やスーツケースを引き、中には子どもと手を繋ぎ、さらにはカップル同士は指を絡ませている。友人と楽しそうに話している者もちらほらと垣間見える。そうした人々はもれなく宇宙服を着ている。和泉と同じように新しさが目立つものを着ている人間も多少はいるが、古びれた様子のもの、破れかけているもの、自分のサイズに合わずにぶかぶかなものなど、多様に満ち溢れた光景となっている。そこへ「ポン」と電子音が鳴り、入口辺りが急に静かにざわめく。

和泉は着たばかりの宇宙服に、部屋に置いてあった大きなリュックサックを背負いこんで苦しそうに歩いている。手にはあのノートと有効期限すれすれのパスポート。それを持って入口付近へ行くと、案内係らしき女性が「まもなく出発となります」と言って彼を中へ入れようとした。和泉が少し怖気づいて周りを見廻すと、みんながみんな入口の方を気にしながらも、足を止め、俯き、悲しそうな顔。顔。顔。それで心配になった彼は、案内係を見た。彼女はとても美しい笑顔で何も言わずにその中へと誘う。心細げに、それでも背後を気にしないように目を瞑って左足から入った。

それと同時に、階段を踏み外したかのように急落下。落ちる、落ちる、落ちる——バランスを取ろうにも方向が分からず、下も上も右も左もすべてが混同した世界の中へ入ってしまったことを知る。そして突然「落ちる」という感覚を失う。和泉は落ちていたのではなく、吸い込まれていたのだった。その場所は宇宙。何も感じない、宇宙そのものの中。

平泳ぎの如く、手足を駆使させて泳ぐように進もうとするが、手に持つノートが邪魔で手放す。そして、馴れてしまうと、水の中よりも無抵抗に自分が進んでいることに気が付く。楽しくなって無我夢中で方向も何もかも気にせず、只管に泳いでいると、光が凝縮した街の姿が目の前に見えてきた。その光の醜さと強すぎる輝きに目を閉じたが、和泉は腕で目を隠しながら背負っていたリュックをその街に投げつけた。すると、猛スピードで衝突し、光の街が爆発、静寂が耳を襲った。手にも背にも何も身に着けぬ自由の身となった和泉はただ浮かんで、その感覚を存分に味わった。

そこへ輝きを失った大きな衛星、月が視界に入ってきた。彼は地球に背を向け、そして、月の周りを泳ぐ。光がある方は美しく、艶やかに魅惑の表情を浮かべ、彼に誘いを訴える。しかし、暗闇の部分と言えばクレーターのごつごつとした厳しさが目を刺激する。何周もした後、より美惑(みわく)を撒き散らす暗闇へと降りたった。そこでは視覚もなにも役に立つものはない。ただ己の無感覚に従うしかない。

地に足を這わせて歩き出すが、感触も何もな

いものだから、天か地かの現実性も失った全くの素人。実際は頭を地に足を天に向けた異邦人の彷徨い。そこから水平に手を突き出すと、月に見放され宙に舞った。直立の恰好のまま回転して無重力の悪戯に任せるがまま宇宙の広大さを受け取るだけ受け取った。

その動きが止まると、鮮やかな色彩のカーテンが目に映る。地球には見えないはずの月の裏側の向こうにある美しき幻影に目を奪われ、己の感傷に浸る場所に背を向け、時が赴くままに浮遊し、転回し、享楽し。

間もなく、臍の下あたりに強い痛みが襲い、引っ張られるように地球に向かって身体が動き出した。その速さと強引さに心が乱されるも、先の光景を焼き付けようと目を見開いたまま、月影に隠れてしまうまで凝視、見えざる者になると涙、そして、先ほどの入り口とは別の、出口に突然放り出された。節々に痛みを感じながらも涙を拭き、立ち上がる。近くのベンチに座る。その場所には入口とは打って変わって人っ子ひとりいない。影すら見えない。ベンチも床も埃だけの廃墟。もしかしたら、不使用の地かも知れないが、どっちにしろ、そこは廃れていた。

和泉はもう一度その場所へ戻りたくても、出口は入口には成りえず、閉め切られていた。扉に身体をぶつけ、破ろうとするも、その痛みだけが跳ね返ってくる。何度も何度も彼は試みるが、それでも、出口は開くことはなかった。

目が覚めると和泉は汗だくの状態であった。綺麗なままだった宇宙服が、汗で染みている。急いでそれを脱ぎ、丁寧に元の場所に戻した。そして思いついたように時計を見るとまだ午前5時であった。感心したように微笑みを浮かべ、窓を開けて外を眺める。白みだした空には眠り遅れた一番星が浮かんでいる。

汗を流すためにシャワーを浴び、頭を拭きながら部屋に戻る。そして壁に掛けた宇宙服を見つめる。和泉は数回、深呼吸をした後、荷造りを始めた。鞄の中には数日分の下着と洋服だけを詰め込んで、パスポートとノートを外側のチャックに入れ、外へ出た。すでに朝の儀式が始まっており、人々の表情に感情はない。忙しそうな流れ作業の中でひとり、和泉だけが太陽に呼応して明るい顔をして悠長な足取りで、舌打ちされても、肩をぶつけられても、半分微笑んでいる。そのまま彼らと一緒に電車に乗り込んだ。

行き先はもちろん空港である。今までは和泉の欲望を囲むだけの城壁だったが、今ではれっきとした解放者である。彼の眼が見つめるは窓の外。あの飛行機を見つめていた少年と同じ表情をしている。和泉はチケットを買い、そして、ターミナルに向かった。素早く出国審査を終わらせ、待合室で震えている。

大きな電子版に飛び立つ飛行機が最上に躍り出ると、少し緊張しながらも搭乗口の方へゆっくりと歩く。順番に並んでいると、脇にゴミ箱が見えてきた。和泉は鞄から例のノートを取り出し、一瞬、迷ったように、愛おしそうに見つめるが、それを捨てた。

そのままゲートの中に入る。「行ってらっしゃいませ」という乗客員の言葉に勇気を背負い、いざ飛行機の中へ。ここから彼の「飛行計画」が始まりを迎えるのだ。明日がどうなるのかは分からない。けれども仮に、すべてが違ったとしてもそれは間違いの始まりというだけで、もちろん、終着地点への誤りではない。今日の我が身は昨日の残像、明日の我が身は今日からの飛躍である。和泉は自分の席を見つけて座る時に呟いた。

「これからだよ。これから――」